

【研究論文】

政治と読むこと或いは人物に寄り添うということ

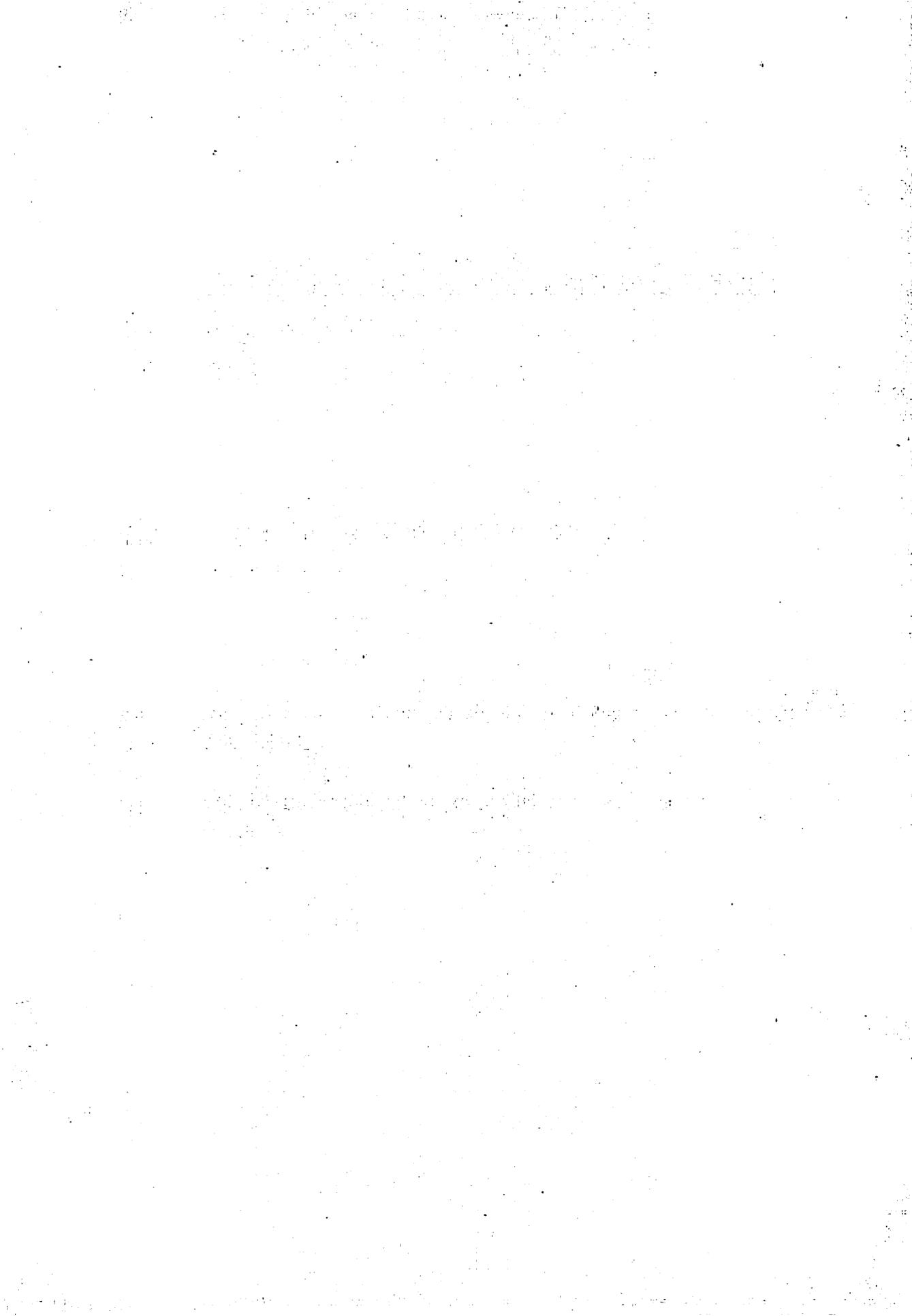
—楊逸『ワンちゃん』をめぐって

疋田雅昭

『立教大学日本学研究所年報』第9号 2012年3月

Reading politically or reading sympathetically : '*Wan Chan*' by I.Yan
HIKITA Masaaki

Rikkyo Institute Of Japanese Studies Annual Report No.9
March, 2012



【研究論文】

政治と読むこと或いは人物に寄り添うということ

—楊逸『ワンちゃん』をめぐって

疋田雅昭

『ワンちゃん』は、平成一九（二〇〇七）年一二月の『文學界』に掲載され、芥川賞の候補となった楊逸の小説である。受賞自体は、本作ではなく、「時が滲む朝」（『文學界』平成二〇（二〇〇八）年六月）によって翌年になされることになるが、『ワンちゃん』の選評では、主として作者の日本語能力についての問題が取りざたされた。それは、この小説の稚拙な日本語をどう考えるかという点に集約され、それが日本語文学をどう受け入れるべきなのかという問題にずらされ、さらには、主人公と目された「ワンちゃん」を受け入れられるかどうか、という問題にまで変容させられている。

最も典型的なのは、村上龍の選評である。

日本語表現が「稚拙」という理由で受賞には至らなかった。だがわたしは、移民二世や在日外国人による今後の日本語表現にモチベーションを与えるという意味でも受賞してほしかった。

日本語の稚拙さについては、池沢夏樹、小川洋子、宮本輝なども同様に選評で触れており、石原晋太郎などは下記のような辛辣さである。

アーサー・ピナード氏の詩集の日本語としての完成度と比べれば雲泥の差である。選者の誰かが、「こうした素材を描いた小説が文藝春秋の本誌に載ることに意味がある」などといったがそれは本来文学の本質とは全く関わりない。

しかしながら、本論で問題としたいのは、日本語の巧拙のことではない。この選評における、小川洋子、高樹のぶ子、川上弘美、山田詠美に共通し、さらには数少ないこの作品に肯定的な男性評者たちに見られる、この作品に対する「読者」としての問題である。

小川は「ワンちゃん」を「愛すべき人物」と評し、川上は「もう一度会いた」くなり「目が離せなく、弱く、応援したくなる」人物であると述べ、山田は「一番応援したくなる」のだと言う。

この小説に一定の評価を与えたのはこうした女性評者たちであったが、彼女たちは小説中の人物である「ワンちゃん」の人物像を評価し、ある種の政治性の存在を「無かったこと」の様にして読む態度を決め込んでいるのではないか。そしてこの小説を評価する数少ない男性選評者たちは、逆に日本語の稚拙さと天秤にかける形で、内容の「政治性」の重さを問題にしてこの小説を「救おう」としている様に読める。

文学は政治を題材に出来るが、政治は、文学を包容し得ない。選考と政治は無縁なり。

この山田詠美のコメントは非常に重要である。この小説が日本語を母語としない作家によって書かれた「日本語小説」であること、そして二国間の社会的経済的な構造の中におかれた女性たちの問題を扱っていることが、選考において、ある一定の「政治性」を発揮してしまったことをはっきりと語っている様に論者には思えるからだ。それは言うなれば、国家間の経済格差から生じる諸問題と女性、そして日本語小説という幾重にも重なる政治性を意識するが故に、逆説的にその差別構造を補完してしまった結果であるとも言える。

そして、そうした小説外部の周辺事情への拘泥は、この小説を「読む」ことからしか生じ得ない様々な可能性を、結果的にどこか遠い場所に置き去ってしまっているのでは無いかと思われるのである。

この拙論で試みたいのは、今後もこの小説の「読み」を規定し続けてしまうであろう、「ワンちゃん」の心情に寄り添おうとする読み方から生じる問題系についてである。

1

小説は、焦点人物である「王」の「名前」についての語りから始まる。

「ワンちゃん」というのは、日本でのニックネームで、中国語の名字の「王」から呼ばれるようになった。現在既に日本の国籍を取得している彼女だが、元の「王愛勤」から且那の名字を名乗り、「木村」に改名した。「紅」？ まるで日本の「花子」みたいにありふれている。なぜまたそんな野暮ったい名前に、と思うかもしれないが、そりゃもちろん訳が……

「ワンちゃん」の元来の中国名は、愛勤であるが、この勤労を愛するという名前が、物語では、ある意味彼女の運命を決定づけている。そもそも表意文字で命名する漢字文化圏において、名前が人生の意味を導くというのは、よくある設定ではある。しかし、この物語に出てくる多くの女性たちは、そうした様々な運命論に大きく支配されている。

しかし、ここで意外に忘れ去られがちなのは、「紅」という日本の名前に改名した方である。これは、実は物語の中では重要な役割を持っているが、その点は後述するとして、ここでは小説のタイトルと彼女自身の呼称が「ワン」である為に、見落とされがちな点であることだけに留意しておきたい。

貧しい農村だから、周りに観光地があるはずもない。昔は下放された知識青年が宿舍として使っていた空き家を改装して、公務出張者が宿泊する招待所となった。それでもこの辺に招待所があることはほぼ奇跡に近いことで、利用率もダントツに高いという。半径三十キロの鎮と村々が、公的な会議祝祭などはもちろんだが、農民個人の紅白行事（祝い事）の際にも活用し

ているとのこと。

この物語を支えている原理は、常に差異≒格差である。中国の女性を日本の男性とお見合いさせる事業を営む「ワンちゃん」だが、物語の舞台は、中国にとってさえ、未だ現在の様なめざましい経済発展など思いもよらぬ時代のことである。中国と日本の経済的な差異≒格差を背景に中国の女性は日本に嫁ごうとしているのだ。だが、同じ中国でも都市部の女性は事情が違う。

この商売を始めた頃は、北京や上海といった大都市出身の女性をターゲットにしていたが、彼女たちは大抵日本の恋愛ドラマの見すぎで、日本なら何処でも賑やかで現代的な町で、高級マンションに住んで、旦那が仕事に行っている間に、自分が高級アクセサリをつけて、お酒落な服を身に纏い、大きなデパートに買い物に行ったり、エキゾチックな洋風カフェで友人とお茶をしたりできるものだと思い込んでいた。日本人と結婚すればそんな優雅な生活が出来ると勘違いして、憧れて日本にやってくるものの、いざ現実には、住む所は山奥の辺りに人影も見えない辺鄙な田舎で、旦那の年老いた親と同居して、日の出とともに畑に出て、日が暮れて家に帰れば、炊事、片付け、お風呂等々が待っている。都会育ちの女の子には到底耐えられるはずもなく、失意の中で、離婚して帰国するなり、逃亡してしまうなりして、色んなややこしい問題が起きてしまう。

都会の女性たちは、その圧倒的な情報の差異≒格差によって、日本にある種の憧れを形成し得る状態にある。そうした理想と現実のギャップから生じ得る可能性を「色んなややこしい問題」としか考えない「ワンちゃん」の視線は、限りなく顧客である日本人の田舎の男性に近い位置にある。「田舎の男には、田舎に行って相手を見つけてあげれば良いのだ」という考え方は、まさに女性を商品としか考えない視線である。物語には、しばしば中国の田舎の女性たちの境遇に同情している「ワンちゃん」の心情が描かれるため、こうしたビジネスライクな側面があることが読み落とされがちであることを、ひとまず指摘しておかねばならないだろう。

前世紀八〇年代の後半から九〇年代の初めにかけて、中国では洋服の露店が急が増え始め、ファッション業界も飛躍的な発展を遂げた。ちょうどワンちゃんが商売をして四、五年の頃であった。町中で人民服の灰色を次第に見かけなくなって、いつしか新ファッションの鮮やかさに一変した。お陰で何処の都市も一昔前とすっかり変わって活気が沸きあがった。最も激しく変わったのは、灰色に抑えられていた金銭欲である。

そして、結婚相手を斡旋する商売の前に長年手がけていた、洋服関連の商売もむろん同様である。禁欲の社会主義体制から自由経済への転換、選択肢のない人民服から選択の自由という急激な需要急増を背景にした商売ではあったが、人々のデザインへの欲求などが常に情動的な差異≒格差に基づいたものであることを、常に敏感に感じ取る才能を「ワンちゃん」は持っている。

ワンちゃんは思い切って十五年も経営していた店を全部売り払って、隣町にいる親戚に頼って、服の卸売りの事務所を構えた。長年の経験から、これからは高くてもセンスが抜群で質の良い服が売れると予感して、自分の工場の製品のクォリティ向上に力を入れ、生地やデザインなど全て自分で考案し、一度の生産量を抑えて、在庫を零にするように試みた。半年間やってみたところ、考えた以上に反響が良かった。

需要と供給量の格差によって経済が流動するのは当然のことだが、一定量の流通が整ったところで次に経済を動かすのは、モノでは無く記号的な差異である。「ワンちゃん」自身が、自己の商売の最盛期を「日本のバブル期もこんな風だったのだろうか」と振り返るシーンがあるが、生地やデザインに拘った限定生産に着手しようとする「ワンちゃん」の判断は、まさにバブル期のDCブランドブームの視線と同様なものを有している。

こうした差異≒格差は、物語に現れる男や女たちの中にも明確に刻まれている。

「あのさ、見合い終わったら、気に入った女を、連れてきて良いんだろう？」部屋に入った宇野がドアを閉め、笑みを浮かべて聞いた。

「駄目」ワンちゃんは宇野の真意を理解した。

「ええ？ 前ほかので来たとき、大丈夫だったけどな」宇野の窪んでいる口が少し歪んだ。

「駄目駄目、ここ田舎、警察怖い、結婚しないだめ」ワンちゃんの顔が興奮気味に赤くなった。

宇野は、このお見合いを結婚制度の手段とは考えていない男性である。性の相手探しとしてのみこのツアーに参加している宇野のあり方も、性を買う／買われる関係としてのジェンダー的差異≒格差を背景にしていることは言うまでもない。しかし、この宇野のあり方が、たとえこのツアー参加者の男性達の中でイレギュラーであったとしても、圧倒的経済力を背景に嫁探しに来ている日本人と、国外に嫁ぐしかない中国人女性との差異≒格差を背景にしている点では同じである。そして、他の男性たちは、この宇野との対比によって、その属性を明確にしている。

「ニーハオ！ や、や、や、山内です」目の周りは何故か赤く腫れているようで、笑ったつもりで、ニヤっとしたら、逆に顔が怖くなった。会場は少し静かになった。

同ツアーに参加する山内は、どもり症の赤ら顔の男性である。田舎暮らしという地理的条件に加え、会話、ルックス、年齢等、男女の恋愛コミュニケーションのマジョリティから遠く疎外された位置にあるこの男は、ある意味最も典型的なツアー参加者であると言える。

「土村さん」

「ニーハオ！」山内の傍から顔の黒い人が立ちあがった。

「土村さんは日本の愛媛県に住んでいる、四十九歳。八百屋を経営、年収約400万日本円。ほかに家と山も持っている。今七十三歳になるお母さんと一緒に住んでいます」

こうした男性たちは、日本では低収入な商業・農家に従事し、田舎暮らしを余儀なくされている。そして、日常生活では女性に縁のない毎日を送るしかない。そして、結婚相手には、義父母の世話、農業作業の従事、家事全般、と多くの負担を望んでいる。このことにより、適齢期に女性と恋愛し結婚するというシステムからは遠く排除された男たちである。こうした国内的な差異≒格差を、国同士の差異≒格差を利用して解消しようとするのが、「ワンちゃん」の商売にある構造にほかならない。

秋姉の指の先を見ると、入り口の近くに赤いセーターを着ている丸顔でぽっちゃりとした中年女性が、豊かな胸を伸縮性のあるセーターに包んで、大きな目から優しい笑みを零している。この赤セーターから始まり、緑、黄、紫と色が鮮やかに移り変わってグラデーション風に広がっている。濃く化粧した顔と、女の群れならではの独特な明るい談笑とで、田舎の鄙びた温かい匂いが漂っている。

一方でお見合いの相手となる女性たち。このセーターの女性呉菊花が、「赤」と「豊かな胸」が弁別の指標となっている様に、お見合いに参加する日本語が通じず日本の文化も理解していない女性たちの個性は基本的に「見た目」である。

ワンちゃんの正面からピンクの花柄のシャツにジーパン姿ですらりとした背の高い女の子が立ちあがった。

「こんばんは、張麗麗です。二十四歳。料理が得意です……」すらすら堂々と日本語で話している張麗麗が、ワンちゃんをはじめ日本人の男性陣を驚かせた。

張麗麗は、都会で日本語を学ぶだけの経済力を持っており、それは鎮長の孫娘という地位からくる村内（鎮内）の差異≒格差である。しかし、それは二国間の差異≒格差の中に容易に解消されてしまう微細な差異にしかならず、結局は「すらりとした背の高い女の子」としか認識されない。

「孫領弟！」

「はい」元気の無い声とともに張麗麗の後ろの隅っこから弱々しい感じの女がのろのろと席を立て、「こんにちは」と言って顔を少し上げた。色白の顔に大きな黒い目をしたなかなかの美人である。

孫領弟は、跡継ぎとしての男児を欲する当時の中国の社会風潮と、一人っ子政策という社会制度の間に挟まれた犠牲者である。

「ん、たぶん私は男の子を産めないんだ」孫領弟が不安そうに下を向いた。

「はは、何だ、そのことだったのか。大丈夫よ、日本人はね、そんなことを気にしないんだよ」

「本当？」

そう聞いて半信半疑の孫領弟は少し穏やかになって、ワンちゃんを見て微笑んだ。傍に立っている山内が意味をわかったかのように喜んだ。赤い顔に、笑いと一緒に汗の珠が光った。

また、そうした社会風潮は、既にこの女性達にも内面化されていることにも注意を払うべきであろう。こうした内面化に至るほど制度に封じ込められた女性たちには、「この赤セーターから始まり、緑、黄、紫と色が鮮やかに移り変わってグラデーション風に広がっている」と視覚的な描写がなされていることは前述したが、これがツアーに参加した男たちの視線であると同様に、まぎれもない「ワンちゃん」自身の視線であることにも留意しなくてはならない。実際、「ワンちゃん」が彼女たちを弁別する指標は、「豊かな胸」「すらりとした背の高い」「黒い目をしたなかなかの美人」とルックスに関するもののみである。

お見合いに参加している女性たちの心情描写が無いのでその真意をはかることは出来ないが、少なくともこの女性たちを斡旋した秋姉や「ワンちゃん」たちにとって、女性たちがこうした社会的な格差から抜け出す唯一の手段として、表層的な女性性のみが重視されていることは間違いない。

2

こうした自己の商売を支える差別の構造について、「ワンちゃん」自身は非常に無自覚である。だが、不思議なことに、それ以外の差別構造に関しては、とても自覚的なのである。この矛盾をどう考えるべきなのだろうか。この小説の「語りの現在」は、明確には設定出来ないが、少なくとも今回のお見合い事業を実行しようとした時点より後であることは確かである。

「本当に一瞬だったわ」思わず咳いたワンちゃんは苦笑いした。露店の仕入れのために、結婚したとはいえまだ二十歳の女が、一月のうち半月も一人で広州に行つては、たちの悪い卸商人を相手にしたり、鉄道の運輸部とあの手この手を尽くして交渉したり、商品をいかにして早く露店に出せるか必死の日々だった。商売を始めて十五年、一生分の知恵、一生分の体力、また一生分のお金を使い果たした。お陰で一生分のお金も儲けた。が、そのお金は今どこへ？

「あの人」とはワンちゃんの前の夫だ。

(傍線部は引用者)

現実の時間の中に、時折挟まれる「ワンちゃん」自身の回想は、この語りの地点において、過去の様々な差異の構造がはっきりと自覚されていることを明確に語っている。細かく見れば、傍線部

の様に、語り手の存在は「ワンちゃん」とは別に設定されているが、ほとんど「ワンちゃん」のみに内的焦点化されている語り手の位置は、ほとんど「ワンちゃん」のそれに近い様に見える。

語り手が限りなく「ワンちゃん」に近いと考えれば、選評における日本語の稚拙さに関する問題は、登場人物である「ワンちゃん」の設定と呼応したものであるとも言える。むしろ、それは詭弁に過ぎないかもしれないし、逆に物語『ワンちゃん』における構造的なきっちり意識している語り手を、描写人物たちとは別に明確に意識するのであれば、問題は、両者がどんなに「近い」としても、両者の間に横たわる決して解消されることのない「距離感」(＝イロニー)の方であろう。

一年過ぎたある日、前夫がまた何の前触れもなくワンちゃんのいるオフィスを訪ねてきた。今度は傍に息子も立っていた。

「星星、ほらママだぞ」前夫が息子の頭を撫でながら促した。

「星星はさ、お前に会いたくてな、毎日泣いてるんよお、なあ星星、早くママって、ほら呼んで、会いたかったろう」何も言わずよそよそしい眼差しでワンちゃんを見ている息子に前夫が少し焦って、その肩を揺さぶった。

「ママ、会いたかった……」息子が父親の手から抜け出て言った。涙があふれ出たワンちゃんは息子の小さな肩を抱きしめた。

「俺もな、よく考えてぞ、やっぱお前のことが好きなんだよお、やり直そうか、なあ星星、お前もママが好きだよなあ、……」前夫がワンちゃんの肩に抱きついてきた。ワンちゃんは嫌がって力強く振り払った。

見た目だけに惹かれた男性と、その間に生まれた元夫にそっくりな美男子である息子。やがてはその息子すら自覚的に母親に金を無心するようになる。母親としての罪悪感や息子への愛情という問題を考慮する必要のない夫に対して、「ワンちゃん」がそれを拒否出来ない理由はわからない。にもかかわらず、何度も現れては、「ワンちゃん」の財産を搾取してしまう男たちに関して、「ワンちゃん」のとする選択肢はいつも「漂白」「浪人」、つまりは逃げることだった。行く先々での労働＝生産活動においては、抜群のセンスを発揮しながらも、いつも逃げ続ける人生。まるでパラノイアとスキゾフレニーが同居した様な「ワンちゃん」の人生は、定住、生産、搾取、逃走の繰り返しであったとも言える。

物語において、情動的な格差を背景にしたものが「生産」であるとしたら、男女、親子の差を背景に「搾取」が行われており、そうした「搾取」を無にするために、それまでの全ての「生産」を放棄し、夫子の知らない土地への「逃走」が繰り返される。

商売を行っている時点ではわからないが、日本の社会を見知った後の語り手の視点から見れば、「ワンちゃん」自身の経済活動が「差異」への自覚的な目配りから行われていたことは明確である。言い換えれば、それは当時の日本と中国の社会を比較し得る特権的な視線を有していたことの現れでもある。

しかしながら、その視線は、自己の人生の選択には届かない。まるで、全てを見通せる場所に

ながら、己自身だけはまったく見通すことが出来ないパノプティコンの中心に位置している様だ。むしろ、「ワンちゃん」の外側に語り手の存在が確認出来る以上、その語り手自身は、そうした「ワンちゃん」の姿をあえて黙って描写し続けているとも言える。パノプティコンの中心とは、実は当人で無ければ、誰からも見える位置に過ぎないからだ。

ところが一見全てが見渡せる位置にある様な我々読者は、語り手と「ワンちゃん」というこの両者の外側に立つ視点を見落としがちである。特に、語り手と焦点人物が近い小説の場合なおさらその傾向は強いと言える。

3

「逃走」の舞台は、日本に移る。

もう男なんか要らない、とばかり思っていたワンちゃんは、この日本人に会ったときに、何故か安心感を覚えた。前夫と比較すれば、顔は格好良いどころか、むしろ牛に似たブサイクそのもので、もちろん流し目なんかできそうになかった。

こう決意して、日本に「逃走」して来た「ワンちゃん」であったが、自己の「逃走」を客観的に相対化し得る術をもたない「ワンちゃん」は、そもそも今回の日本への逃走に関しても、国籍こそ違えど「男」を使って逃走したことは同じであるという事実には気がつかない。

ワンちゃんの旦那は二人兄弟の次男坊で、ある地方都市の電機工場で、製品の組み立てをする作業員をしている。今年五十七歳になる兄の長男のほうは十年前に交通事故に遭い、後遺症のために仕事をやめ家に籠り、事故の賠償金と姑の年金で暮らすようになった。

地方在住のうだつが上がらない男。養うべき老母と、障害を負った兄と同居という、日本での「ワンちゃん」の夫は、後に彼女自身が「顧客」としている日本の男性たちと、恋愛＝結婚システムの外部にいるという点において何の変わりも無い。

新婚当初このようなことが頻繁に繰り返されていたが、時間が経つにつれ減ってゆき、六年が過ぎた今、殆どなにもない状態になった。

さらに、「ワンちゃん」の夫はまともに性行為が行うことが出来ない。障害を負った兄は労働と同時に家長という地位からも疎外されているが、母親はその兄にかかりつきりであり、弟の方は、一家を支える立場にしながら、十分な対価を得られる労働からも家族の再生産システムからも疎外されている。

姑はお喋りが好きなお婆ちゃんだ。ワンちゃんのことを会うなり凄く気に入ってくれた様子で、ペラペラ喋られて、ワンちゃんはもちろん意味なんか全然わからなくて、ただただ精一杯作った笑顔で振舞っていただけであった。

「ワンちゃん」の日本での家族構成は、兄のことを除けば、土村のそれとよく似ている。また、土村の母親もワンちゃんの義母と同様、やはりよく「喋る」人間であり、若干の介護を必要としていること、そして地方在住である点でも両者は一致する。そして、恋愛＝結婚システムから疎外され、その見合いの相手を国外で探さざるを得ないという点においても、また同様である。

「うん、勝雄な、働き者でな、何の悪い趣味もないけん……煙草も、女も……」
「……………」

「あの子な、良い女房に恵まれんかって、八百屋の手伝いなんて言うて、子どもも生んでくれんかった、……結婚して三年目に男を作って、外泊してな、勝雄が怒って追い出そうとしたら、今度は慰謝料や生活費やって、大変だったわ……、あの子はもう一生結婚せんと言うてな。困るけん、最近うちが腰を悪くしたもんやけ、余り動けんようになってな……」いっぱい喋って、お婆ちゃんの顔が少し赤くなった。

共通点は、かえってその差異を明確にする。今まで述べてきた様な主要キャラクターの構造的配置などへの配慮は、この小説世界において、このことが明確に意識されていることを裏付けている。土村と夫。この両者の似通った境遇こそが、「ワンちゃん」に夫と土村を比較させることになり、結果、お見合いに失敗した「ワンちゃん」が、土村に理想の夫像を見い出そうとする物語展開を支えている。

土村の黒い顔が少し赤らんで、目がキラキラして、まるで野菜の喜ぶ表情を見ているかのようだった。喜んでいる野菜ってどんな様子かな、今の土村の顔とそっくりだったりして。そう思ったワンちゃんはげらげら笑い出した。

土村に顧客以上の感情を感じてしまう「ワンちゃん」であるが、恋愛の相手は、結婚の相手を斡旋すべき顧客である。加えて、独身でもなく若い年齢でもない「ワンちゃん」が、土村の相手となるべくもなく、物語は悲恋の結末に向かうこととなる。さらにそこに、「ワンちゃん」の義母の死が重なることによって、物語は悲劇の様相をより強めてゆくことになる。

おそらく、ここが「ワンちゃん」への同情を読み込む選評が多かった所以であろう。しかしながら、語り手が提示する人物像には、こうした同情すべき点とは、あえて矛盾する在り方も提示されており、そのことについて語り手自身は一切語らない。そう考えると必ずしも同情に偏った読みの「正当性」は、保証され得ないはずなのである。

山内は孫領弟に一途な感じで、真っ先に決めてくれた。このカップルは意外と上手く行くかも、とワンちゃんは直感した。土村は季芳芳か呉菊花かで迷っていたが、ワンちゃんは懸命に呉菊花を薦めた。何故だろう、迷信を信じるわけではないが、万が一季芳芳が]「剋夫命。だ」という噂が本当だったら……、ワンちゃんはもうそれ以上考えたくない。でも幸いなことに、宇野が季芳芳が良いと申し出た。ワンちゃんはホッとした。季芳芳と孫領弟のストーリーを聞いたとき、彼女たちのために必ず日本で相手を見つけてあげるとワンちゃんは内心そっと決めていた。この二人を今の環境に放っておくと、世間の噂に殺されていくのが目に見えているからだ。

一見、中国の女性たちの境遇に心を寄せているように見える「ワンちゃん」であるが、ここは注意深く読まねばならない。季芳芳にまつわる迷信をもって、結局は土村の相手とするに足らずと判断している「ワンちゃん」は、既に宇野の本性をよく理解しているはずであるにもかかわらず、季芳芳を平気で宇野の相手におしやっている。

孫領弟はともかく、季芳芳は、中国の田舎における世間の噂から救ってやれたとしても、宇野相手に日本における彼女の幸せがほぼ保証されないことは、わかっているはずである。それが見えないのは、土村に対する感情に「ワンちゃん」が支配されているからか、それとも、自分自身の不幸を招いているシステム自体に「ワンちゃん」が無自覚であるからか……。しかし、実はそれは読者による二者択一ではない。

何よりの強みはアルバムである。若くてきれいな女の子たちが写真の中から可愛い笑顔で見つめている。この業界のプロならば、誰もが商品として売れそうだと思うだろう。またそう思わせるのがワンちゃんの腕でもある。長年商売をやってきたワンちゃんにはそのあたりがわかっている。喜ばしいことに、そのうち三社ほどから条件つきで取引しても良いという返事が返ってきた。ワンちゃんは自立する道への第一歩を踏み出し、涙ぐんだ。

日本で結婚斡旋の商売を始めようとする「ワンちゃん」には、女性たちは商品にしか見えていない。それは、「ワンちゃん」の商売人としてのすぐれた勘であるとも言える。しかしながら、その商売は、現在の「ワンちゃん」自身の境遇を作った原因でもあるのだ。いい商品を用意したところで、いいお客さんを選べる訳ではない。洋服ならば、売れさえすれば、客の善し悪しはさほど問題ではないだろう。しかし、人は洋服のようなモノではない。

むろん、そのことを「ワンちゃん」自身が割り切った確信犯であるのならば、話は別である。中国の女性たちの境遇に一々感情を寄せる「ワンちゃん」には、当然その割り切りは無い。「ワンちゃん」の中国人女性に対する感情は、その意味において、至極ご都合主義的なものであると言わざるを得ない。

ワンちゃんは何も言えなかった。そもそも一番喜ぶべきなのはワンちゃん自身なのだ、これで五組も成婚したから、仲介手数料は一人最低 15 万円の計算で 75 万円が入ることになる。しかし、今のワンちゃんにはお金のことなんか全く考えられない。あの土村がもうすぐ女の手を引いて戻ってくる。しかも今夜はその女と共に過ごそうとしている。ワンちゃんは体中寒気がして震え出し、頭が炸裂しそうに痛くなった。

ここで「ワンちゃん」を支配しているのは、お金では無いかもしれない。しかしながら、個人的な想いに支配された「ワンちゃん」の感情には、他の中国人女性、そしてもちろん言うまでもなく、土村以外の顧客に対する感情は消去されている。

牛の背中に真っ赤なゆったりめのチャイナドレスを着た呉菊花が、横向きに座っている。赤いベールを目深に被って、牛の揺れにしたがいベールの下から真っ赤な口紅を塗った唇がその姿を覗かせ、幸せが溢れんばかりの笑顔もチラリと見ることができる。ワンちゃんの頭は真っ白になった。

「赤いセーター」を着た美しい女性呉菊花は、「赤いベール」を被って、「真っ赤な口紅を塗」って土村の処へ嫁いで行った。

十二月に入って、花嫁のピザが次々と下りはじめた。呉菊花のピザも十二月の中旬に出た。季芳芳のピザだけがなかなか下りてこない。ワンちゃんはピザのことを構う余裕なんかもうない精神状態に陥っている。姑の容態は、遂に病院の先生から「年越しできないかも」と告げられるまでになった。姑にもっと生きて欲しい、もし姑に死なれたら、自分が日本にいる理由がなくなるような気さえする。

ここで、「ワンちゃん」が季芳芳のピザに関心を避けないのも、宇野や季芳芳に対する感情とは全く無関係の個人的な理由である。しかし、ここに、唯一の信じる日本人としての義母との関係を読み込むことも我々には出来ない。呉菊花に関する事務手続きは、土村の頼みであり、すぐに実行に移されるからだ。中国で子供と過ごし、年明けに来日する由を聞いた土村は、こう述べる。

「やっぱり母親なんや、これから子どものこともよう考えてやらんな」土村はワンちゃんから視線をそらすように顔を下に向けて言った。ワンちゃんもまた、涙がどんどん目の中に湧いてきて、仕方なく後ろを見るふりして、堪えた涙を唾と一緒に無理やり飲み込んだ。土村のざらざらした大きな手を見ていると、これを掴んで自分の胸に当てさせて、心のうちを知らせたい衝動が幾度もワンちゃんを襲った。それも唾と一緒に無理やり喉の奥に押し込んだ。いけない、土村はもう呉菊花の夫だ、自分も旦那がいる身である。ワンちゃんは目を瞑って無言で自分に言い聞かせた。

しかし、こうしている間にも、義母の危篤状態は続いている。「ワンちゃん」の感情は常に矛盾をはらんでいる。

「大丈夫さ、俺と結婚した女房だから、ちゃんと許可が下りるって。あいつは良い体してるぞ。気に入ったよ」宇野の顔がワンちゃんに近づき、声を低くして嫌らしく笑った。

「ふーん、じゃ、もう一回申請ね」ワンちゃんが慌てて宇野の顔を避けた。

「お正月に行くからって、向こうに電話してくれよな？」

「わかりました」ワンちゃんはそう答えながら、内心で李芳芳のことが心配で、申し訳なく思った。

結局ビザが下りない李芳芳を妊娠させてまでも日本に呼び寄せようとする宇野をみて、「申し訳なく」と思いつつも、「ワンちゃん」は顧客の言うがままである。このように、彼女の同情は、常にご都合主義なのである。

姑は依然としてベッドで昏睡状態だ。ワンちゃんは大事に抱えてきたストールを、そっと姑の布団の上からかけてあげた。ストールの赤が映えた姑の寝顔は、幸せそうで穏やかに見えた。

幸せを願って中国から持って来られた赤いストールは、一瞬でも義母に幸せをもたらしたのかもしれない。そして、「ワンちゃん」だけは最期の時まで義母に献身的である。

正月休みの間、旦那はいつものように無言でテレビの前にいる。ワンちゃんは姑の家を掃除するつもりで一度行ったが、足の踏み場も無く、ゴミの中でごろごろしている長男を見て断念した。誰もが日々の流れに乗って、姑があの世界に運ばれていくのを待っているだけなのだと感じると虚しくて、何もやる気が出ない。

にも関わらず、義母が最後まで心配していたのは、「ワンちゃん」ではなく、何もすることのなかった、息子のみだった。しかし、そのこと自体を「ワンちゃん」は気にとめる様子もない。彼女の同情は物語の最期まで一方通行であるのだが、それ自体は、彼女の悲劇性を保証する以上に、「ワンちゃん」の同情が誰に対しても一方通行なものに過ぎないことを我々に教えてくれる。そして、自己に向けられる視線を決して相対化することのない「ワンちゃん」像を、この語り手は、彼女のみに内的焦点化しつつも、あくまで徹底的に冷静な視線で描き続ける。

「もうあの世へ逝ってしまったの？」ワンちゃんの涙で曇った目に、真っ赤なストールを身にまとった姑が青々とした空に昇っていく姿が現れ、どんどん遠ざかっていく。赤いストールも次第に小さくなっていく。ワンちゃんの頬に熱い涙が沁みて、幽かな痛みを感じた。遠くへ遠

くへ、赤のストールが終に赤い暈しの点になった。涙の珠がぼたぼたと頬から腕に手に、足の甲までにも零れ落ちた。

義母は、赤いストールとともに、「ワンちゃん」の前から、空へ去っていった。このストールは、「ワンちゃん」が義母の病状回復を願って中国から買って来たものだが、その願いも虚しいものに終わった。

「ワンちゃん」自身も、自己の幸せを願って中国から日本に渡って「紅」という名前を得たが、その願いはとうてい果たされたとは言えない。

突然赤い暈しの点がまた舞い戻ってきた。少しずつ近付いてくる。何か忘れたのかしら、ワンちゃんの涙が一瞬止まり、赤い点が人に見えてきた。幸せそうに笑っている、真っ赤な唇が笑っている。顔が、唇が。呉菊花だ。真っ赤なゆったりめのチャイナドレスを着て、牛の背中に横向きに座っている呉菊花の姿だ。牛に揺られながらスローモーションでワンちゃんに近付いてくる、ゆらゆらしている赤いペールから、真っ赤に塗った唇に幸せを噛み締めている笑顔が溢れ出し……その笑顔がワンちゃん目から涙となって、洪水のようにあふれ出してくる。

物語に散りばめられていた「赤」の演出は、ここに来て全てを集約して現れて来る。赤いスカーフも、紅を意味する名前も、そして、赤いドレスに赤い唇の呉菊花も、皆中国から来るも、幸せを「ワンちゃん」に届けることはなく、再び彼女の前から去ってゆくのだ。

騒がしい病室と別の世界に入っているワンちゃんは、何時までもぼかんとして姑の傍に立ち尽くしていた。

そして物語は、一人「立ち尽くし」たままである「ワンちゃん」を残して閉じられる。語り手は最期まで「ワンちゃん」に対しては、何も語らない。しかし、物語は、義母や中国の女性たち、そして「ワンちゃん」といったような境遇の女性たちの弱者の連帯を語っている訳でもない。また、時にユーモアさえ感じさせながら、どんな逆境にも強く立ち向かってゆく「ワンちゃん」を肯定的に描いているわけでもない。ここで語られているのは、限りなく近い位置に居ながら、決して「ワンちゃん」を受け入れることは無く、ただその矛盾する姿を描写し続ける語り手と、両者の距離（＝イロニー）のみなのである。

5

夫と土村、土村と宇野と山内、孫領弟と季芳芳と呉菊花と張麗麗、それぞれのキャラクターの属性はその対比によって明確化され、またお互いがその属性を保証しあう様に配置されている。

赤のテーマリズムを物語の当初から執拗に配置し、語りの現在を後の方に設定することによって、

一見語り手と混同するような視点人物との間に明確な「距離」を設定する。

ここまで全体の構成に意識的な語り手が、この矛盾する主人公のあり方に気がついていない、と考える方がむしろ不自然なのではないだろうか。この語り手は、我々に、「ワンちゃん」が思ったことを読むのと同時に、「ワンちゃん」が思いも寄らなかったことを読むことをも要求しているのではないか。

小川洋子が指摘する様に、確かに「ワンちゃん」には「愛すべき」側面を有した人物なのかもしれない。しかし、同時に物語が、いや少なくとも語り手が描く「ワンちゃん」は、もっと重層的である。いや、こう言えばいいのだろうか。物語『ワンちゃん』をかたる語り手と描かれる「ワンちゃん」との狭間にこそ、多様な政治性に接続される問題系の端緒があるのだと。

(長野県短期大学日本語日本文化専攻准教授)